太田　今ご紹介いただいた太田と申します。この集いは、「３・11 東日本大震災」の出来事と深く結びついている企画だと思います。本当にたくさんの方々が犠牲になられて、今も多くの皆さんの行方が分からない状態であります。数十万、あるいは数百万という人々が、愛するご家族や、住む家、財産を失って、あの日以来、全く人生が一変してしまったという方々は多数おられると思います。そして今、私たちは、原発事故という、歴史上経験がない、未曾有の混乱、不気味な恐怖の現実に直面し、多くの方々が心の中に深い闇と不安といったものを抱えてしまっていると思います。私もまたその１人です。

ご紹介にあずかりましたように、私はキリスト教の牧師ですが、私が属する教団、日本キリスト教団の北東北３県・青森・秋田・岩手を奥羽教区といいます。そこに 26 年ほどおりました。青森には、ご存じのように、六ヶ所村に核燃料サイクル施設があります。これも今、非常にトラブルが続いていて、大変危惧されています。六ヶ所村のとも関連して、福島の原発事故のことはとても深刻に受け止めていますが、本当に不安な時代を私たちは招いてしまったと思います。

ここにおられる皆さんにも、直接的に被災されている方、あるいは親しい方や親族が犠牲になったり、家を失ったといった形で被災されている皆さんもおられると思いますので、そのような方々にまずお見舞いを申し上げます。また今の時代を生きる一人ひとりが、心のどこかが壊れてしまったと感じているのではないかと思いますので、そのような心の痛みを、特にこのあと先生がお話しくださると思いますが、そのような痛みを少しでも共有する時間とできればと思います。また、今回の震災は本当に広大な領域が被災しているということで、私の報告は極めて限られた狭いものだということをご了解いただきたいと思います。

さて来月、５回目の岩手に行きを予定にしております。最初の２回は、私と妻とで車で行きました。私が往復運転して行ったわけでありますが、東北自動車道を南北に行き交うおびただしい数の車列といいますか、そして東北道から沿岸部に向かっていく車、そしてまた戻ってくる車とその営み、そして沿岸部の悲惨な状況を見て、個人的な感想としては、「アリの行列」という印象を私は持ちました。自分もその１台、アリの１匹に過ぎない。しかし黙々と現場に向かって、それぞれのなすべきことを果たさなければならないということを誰もが感じているように思えました。見える範囲やできる範囲のことは、私たちはとても小さいわけですが、ともかくこの災害に向かわなければならないという思いを持ったわけであります。

少し自己紹介に戻りたいと思いますが、最初に紹介頂きましたように、キリスト教の牧師をしています。飯島先生にここに引っ張られて出ております。立正佼成会の皆さんもこの会の主催者であり、一緒におられるということを聞いて、少々近しい感じを抱いています。私が釜石にいる時代に、立正佼成会の皆さんとご一緒に、沖縄戦を描いた映画で、『月桃の花』という映画の自主上映会に立正佼成会の皆さんと一緒に取り組んだことを思い出します。またかつて大学院時代は、中野富士見町にある製薬会社の宿直をしていまして、

立正佼成会さんの本部がある場所だと思います。また、聖公会の皆さんとも、私は立教大学の大学院だったので、身内のような思いがいたします。現在、青山学院大学神学科の先輩が、山谷において「まりや食堂」というお弁当屋さんを開いております。その山谷兄弟の家伝道所の「まりや食堂」でボランティアをしていますが、時々この聖公会の司祭さんや信徒の皆様ともご一緒したりしています。

さて、そのような私でありますが、1981 年、岩手県にあります遠野教会と遠野聖光幼稚園に赴任いたしました。民話のふるさととして大変有名な遠野に住むことになりました。当時はまだあまり有名ではなくて、古びた寂しい町でありました。教会も幼稚園もとても老朽化が進んでいて、再建が課題でありました。キリスト教の教会は、田舎へ行けば行くほど厳しい環境に置かれます。信徒数は少なくて、礼拝５、６人というのが平均でありました。教会と幼稚園の再建は遠い道のりに思われましたが、それでも７年目に、卒業生や様々な町の方々、熱心な教会員のお祈りによりまして、1987 年に会堂と園舎を建てることができました。

スライドを少しお見せしていきたいと思いますが、これが遠野の教会。下が幼稚園で、上が会堂になっています。和風の会堂を建てまして、外側は洋風なのですけれども、和洋折衷で、内側は和風にして、この後ろに 15 畳ぐらいの和室を造るという、そのような会堂を建てました。

幼稚園の再建のために、宗教法人から学校法人に切り替えまして、その頃、岩手県内にある五つの教会幼稚園を連合し、学校法人岩手キリスト教学園というものを設立して、園舎の改築や環境整備に次々と取り組み、努力をした時期であります。私は幼児教育の専門家ではなくて、むしろ幼稚園経営を支えるという立場でありました。岩手県内の五つの幼稚園の全てにおいて園長を経験しましたし、また園長を合計８回やりましたので、まあある程度は幼稚園のために一生懸命取り組んだと言えると思います。

ちなみに、岩手県はほぼ四国の面積に匹敵いたします。この遠野で 11 年５か月を牧師として過ごして、1992 年の９月から釜石に移りました。釜石の教会もまた小さな教会でありました。最初の役員会で皆さんにお年を聞いたのですが、男性２人と女性２人の年齢をお聞きしました。すると今から約 20 年前で、教会の４人の役員さんの平均年齢 77 歳でした。その平均年齢 77 歳の役員さんを中心として、少人数の教会による新しい夢へのチャレンジを始めたのです。

これが 2000 年に完成した会堂の写真です。去年の９月に撮ったものですが、新生釜石教会は、釜石に二つあった教会が合併し、再出発をして、2000 年にようやく新会堂を建てました。当時の釜石は、新日鉄の合理化により人口減少が続いていて、最盛期の半分以下になっていました。釜石には教団の教会が二つあり、両方とも様々な課題を抱えていましたので、協議を重ねて 1994 年６月に合併式を行い、新生釜石教会として出発し、会堂建築に取り組み始めました。

この時期は学校法人の理事長も続けていました。後で出て来ますが、釜石の隣町にある

大槌町のおさなご幼稚園というところの経営のお手伝いをしておりました。その幼稚園の「学校法人もみのき学園」の設立時の理事として、経営危機にあった幼稚園を再建するお手伝いもしていました。

さて、新生釜石教会の会堂建築のテーマは、環境共生型礼拝堂であります。ソーラー発電。この２本の左側のポールは小さいですけれども風力発電の風車です。それからソーラー温水、雨水利用、井戸水を利用した水冷式の空調、同じくトイレ用の水にも利用しました。他にも様々なことを取り入れて、環境にやさしい会堂「エコ・チャーチ」を目指しました。

今、福島の原発事故のあと、再生可能エネルギーの問題が出ていますけれども、私たちの教区には先ほど申し上げましたように六ヶ所村がありましたので、都会の「核のゴミ」が地方に押しつけられるという構造をどうしたらいいかという問題提起のためにも、地方からの提言として、環境共生型礼拝堂を目指しました。

その建築資金の準備のために、小さな教会でお金がありませんでしたから、釜石で親しい友人となった漁師さんたちから協力を得て、新生釜石教会「会堂建築ワカメ」というものを販売いたしまして、全国の知り合いの教会にワカメをお送りして、それをワカメ献金として、皆さんにご協力をいただきました。漁師さんたちと友達になったことは、私の人生で大きなポイントになりました。

食と命ということを漁業から考えるきっかけを与えられましたし、ずっと気になっていた１人の漁師さんとの出会いが与えられたからであります。

少し写真を進めますけれども、一生懸命取り組みまして、８年かけて準備をし、７年かけて借金を返し、４年後に今回の津波で大きな被害を被ったことになります。この会堂は町の皆様にも随分助けていただきました。それこそ立正佼成会の会員の息子さんの結婚式をここでやったというような思い出もあります。

夜はこのような感じであります。私の娘がデザインしたステンドグラスで、これはノアの箱舟のあとの世界、虹の上にハトがオリーブの葉をくわえていて、神さまが二度と世界を滅ぼさないと約束された象徴としての虹を描いてあります。さらに「森と川と海」というテーマで、リアスの海の中を表現しています。豊かな三陸の海です。

またこのように、ミニコンサートといいますか、100 人ぐらいのコンサートをするのにはとても喜ばれて、町の人もたくさん来てくれる、そのような会堂として用いられていました。これは、関西学院大学の聖歌隊が来た時の写真であります。木のぬくもりのある、自分でも気に入った会堂でありました。

さて、皆様方の中には、「森は海の恋人」というキャッチフレーズをご存じの方もおられると思いますが、私がずっと会いたいと思っていた漁師さんで、気仙沼市唐桑町・舞根浜の畠山重篤さんという方です。畠山さんは大変なインテリの漁師でありまして、文藝春秋社からたくさんの本を出しています。今はほとんど文庫本になっています。『森は海の恋人』や『リアスの海辺から』などその他にもたくさん本を書いていて、現在京都大学の特任教

授でもあります。彼は今回の大震災で被災して、このすてきな舞根浜という、右半分が全部、畠山さんの会社のものなのですが、全部なくなってしまいました。そして、お母様も津波で命を落されています。注意して見ていただくと、新聞やテレビに時々出て、大震災や復興をどう考え、どうすべきかということを、漁師の立場から発言を続けています。20年以上前から、「森は海の恋人」という理念に立って、森を育てる漁師たちの運動の先頭に立ってきました。私はかなり以前から知り合いになっておりまして、何度もお訪ねし、お話を伺う機会を得てきました。畠山さんは、実は、初対面の時に教えられたのですけれども、彼もクリスチャンだということであります。地球温暖化への取り組み、その一つが、森を育て、川を守り、豊かな海づくりに励むことだと。そのような着実な取り組みを通して、地球温暖化の問題を子どもたちにも分かってもらう。そして一人一人の心の中にこそ、１本の木を植えることが大切とする植林運動をずっと続けています。大変大きな働きをされていますし、この畠山さんとも交わりを持ってきたことは、とても大きな励ましでありました。

あの３・11の２日前にも、実は岩手県に津波警報が出ていました。結果としては50センチほどの小さな津波で終わっておりまして、そのことが明暗を分けたと語る友人もいます。新生釜石教会の信徒の方が、あの時も何ともなかった、２日前の時も何ともなかったので、今回も甘く見たという、そのような人がいたということを話しておられました。

私は前日に親しい友人の漁師に電話をして、大丈夫かということを聞きました。その時は、友人は、何ともないから、新ワカメを送るというようなことを話してくれましたし、３・11のあの日の午前10時半に、この気仙沼の漁師の畠山さんにもお電話をして、東京での講演会に来て頂けないかという交渉をいたしました。それで、ようやく畠山さんから、６月の 11 か 23 に、東京で、環境問題での講演をしてもよいという承諾を得ることができました。妻には、忙しい畠山さんからようやくオーケーが出たと本当に喜んだわけですけれども、その４時間後にあの時がやってまいりました。

皆さん、あの時はどこにおられたでしょう。東京近郊も大変な揺れでしたし、長い揺れでありました。それぞれのあの時があると思います。私の妻も仕事から戻れませんでした。私のところにはニュージーランドから避難してきた日本人の知り合いのご家族が泊ることになりました。明日、ニュージーランドに仕事で戻る予定のご家族でした。私が知っている、ニュージーランドに住んでいる人はただ１人しかいなかったのですが、その一人が玄関の前に立っていたのです。クライストチャーチで１か月前に地震があって、そこで被災して、日本に避難してきていました。そして丸ノ内線の四谷駅でもう１回被災したのです。都市機能が停止してしまし、私どもの教会に小さいお子さんと一緒に避難してこられて、そのご家族４人を、おばあ様と一緒に１晩お泊めすることになりました。

また、私どもの下の娘は、現在大学院の１年生ですが、あの時は４年生の卒業間近でありました。岩手県釜石からもたくさんの同級生が東京に出ていて、もうすぐ卒業して、仕事に就いたり、家に帰ったりということの直前でした。そのために、娘の同級生の知り合

いがたくさん、テレビで自分の家が流されていくところを目の当たりにしたわけです。卒業式のためにお母さんが東京に出てきて、被災して、テレビを見ると、家が流され、夫や家族と連絡が取れないというような子どもさんたちもいました。そのような子どもさんたちが娘と携帯で連絡を取り合ったり、あるいは私どものところへ来たりして、不安な１週間、10 日ほどを過ごしました。

さらに、原発事故を覚えていらっしゃると思いますが、今現在、原発事故は、初日から数日以内にメルトダウンという、炉心溶融が起きて、大変深刻な事態であったということを東電も認めています。あの時点で私たちもおそらく最悪の事態が起こっているだろうということを思っていましたので、大惨事への恐怖といいますか、そのようなものに取りつかれる思いでありました。

私たちは今、毎日、もう大地震が来ませんようにと、多分祈ると思います。私は、朝目覚めたときや夜眠りに就く前に、そのように祈って眠ります。あるいは朝そのことを感謝しますけれども、私の教会の方が、毎朝目覚めると、「ああ、今日もこの嫌な世界を生きなくてはならない」と、すごく落ち込むそうであります。多くの方々があの日以来、混乱、不安、おびえ、不眠といったものを抱えていると思います。

私も、あの３・11 から２週間近く、ほとんど電話の前に座り続けていました。というのは、様々な情報が入ってきますし、友人、知人がたくさんいますので、その安否、そして被害の状況、被災者の状況などを、あちらこちらから問い合わせがやってまいります。それの対応で一喜一憂しながら、かなり不安定な日々を過ごしました。

そのような中で、最初の日曜日がやってまいりました。安否が十分把握できていませんでした。多くの方々の安否を確かめようとして手を尽くしていましたが、岩手沿岸に住む具体的なお一人おひとりの名前を覚えて、礼拝の中で、共にお祈りをいたしました。小さな教会ですけれども、集まった全員で大きな輪を作り、原発の収束を含めて、真剣に祈り合いました。教会員の中には釜石に行った経験のある方もおらます。また、岩手の皆さんが東京に来たときに私どもの礼拝に出席をされたりして、すでに交流がありました。さらに、私たちは「食のつながり」ということに一生懸命取り組んでいましたので、ワカメや昆布、友人の作るホタテやカキ、サンマやサケ、イクラ、あるいは毛ガニなどを季節ごとに三陸から取り寄せておりました。バザーでもそれらを販売しておりましたし、近所の皆さんを含めて、教会員には三陸は身近な存在になっていました。単なる被災地ではなくて、あの方々一人ひとりの安否が切実な問題でありました。その一人ひとりをリストに挙げて、名前を挙げて、具体的にお祈りをいたしました。

あの日以来、どのようにあの沿岸が変わったかということを紹介したいと思います。

これは、数日後の、新生釜石教会の会堂の周辺です。奥羽教区議長が行って写真を撮ってくれたものを頂きましたけれども、本当にぼろぼろになっています。会堂の中は、十字架の下のところ、ステンドガラスの２枚めの上まで、道路から見ると大体４メートルぐらいの津波が来ています。中のものは、みんなめちゃくちゃであります。

私たちは最初、１回目と２回目は車で行きました。大震災から２週間ほどして、ガソリンが回復し、道路が通れるようになっていきました。支援物資を満載して、山形を経由して行きました。山形で息子が医者として働いていまして、その息子は今、放射線科の医者であります。震災後、教授の指示で、原発の放射線の測定を山形でも始めていたという息子を訪ねながら、このように入っていきました。息子の親友の実家も無くなってしまいました。

これは釜石の町の中ですけれども、お店は大体みんな、このようにぼろぼろになっています。これはスーパーですが、後ろから向こうまで抜けてしまっていると思います。これは、町の中の、教会の前なのですけれども、電信柱も折れ曲がって、車は大体このような感じです。このようなものは皆さんももうテレビでご覧になっていると思いますが、これは釜石の警察で、２度目に行った時に撮ったものだと思いますが、よく見ると、２階の屋根の上に車が載っています。下にあるのは、廃車になった車を集めている状態です。これは、大きな工場があったのですけれども、その半分はもう壊滅状態です。

これは、私の妻が右端に写っていて、釜石東中学校という中学校が右側にあります。左側が鵜住居小学校といって、この中学校と小学校の生徒は奇跡的に全員が無事でした。妻は中学校でパートで働いたことがあるので行ってみたのですけれども、小学校の３階のベランダに車が刺さっているという様子です。本当に言葉がないといいますか。

これは、釜石湾の、２万トンあるという「アジアンシンフォニー号」です。あまりに大きくて、１枚にはなかなか入りません。一番後ろのところに人が１人写っているのが見えると思いますが、船の大きさが想像つくと思います。

これはあの陸前高田市です。陸前高田市はとてもきれいな町で、私も何度も行きましたし、有名な７万本の松林が全部なくなっています。これは海辺にある道の駅です。これは５階建てのアパートですけれども、その５階まで津波が来ていました。

これは大槌町のメインストリートです。これは私が１回目に行った時ですので、２週間はたっていたのですが、道路だけは通れるように自衛隊ががれきをどかしていました。しかし町はほとんど燃えてしまっている状態です。もう本当に焼け野原でありました。このような感じです。

これは大槌の駅です。町の中心にあるＪＲの駅。駅舎は跡形もなくて、かなり遠方にある水門が臨めてしまう状況です。これが駅のホームですし、同じく反対側、この見渡す限りが焼け野原になっていました。そのような状況であります。

私の友人に何人か漁師がいます。１人は消防団なので、地震のために、耳の悪い義理のおやじさんを助けに軽トラックで走っていって、その義父さんを高台に運んで、そしてまた下って、お年寄りを車に乗せてまた運んで、３人目を乗せようと降りてきた時に、寝たきりのおばあさんを助けようと、他の消防団と一緒に車へ乗せたそうです。寝たきりの方と一緒に消防団３人を乗せて上がろうとしたところで津波に襲われて、もう本当に車がもんどりうって、車もどんどん浸水してくる。ところが、運よく横になったために、左側の

窓を片手で開けることができて、そこから脱出し、津波の中をもまれながら、道路にたたきつけられたりして、また浮上したり、それを何回か繰り返して、最後にとうとう２階の雨どいにつかまって、そして屋根に上りなんとか助かりました。でも、車の後ろに乗っていた２人が他の場所にはい上がるのは見たけれども、５人乗っていて、３人が助かって、２人は流れたということを話してくれました。

また親しい眼鏡屋さんは、ご年配のお医者さんを背中に背負って、もう必死になって高台に逃げて、避難所が教会の裏にあるのですけれども、その避難所に、裏山に上っていく途中で津波が襲ってきて、後ろ側を悲鳴を上げながら流されていく人の声が耳に焼きついていと。でも振り返ることができなかったということを話してくれました。

実は、「希望を共に」という題をつけたのはこの友人の言葉からであります。この友人が私に「何も要らないから、希望を持っきてくれ」ということを、電話の向こうで話していました。彼の消息は分かっていたのですけれども、直接連絡が取れたのは８日めでありました。大変親しい友人でありますが、彼は３日目にようやく家族全員と無事に再会できたそうです。しかし、そのとき心を病んでいた親戚の者が、３日目に首を吊って、自死してしまった。火葬場はものすごい満杯状態でありましたし、それから燃料もほとんどあの時期はなかった。対策本部からガソリンを分けてもらって、太平洋側の釜石から火葬のために秋田までその遺体を乗せて、自分で持っていって、火葬して帰ってきたということで、８日目に私と直接連絡が取れたのです。彼の住む集落の半分以上がなくなっています。ここは尾崎白浜漁港ですが、ここに船が大体 300 そうはいつもあるのです。でもほとんどなくなっていますし、左側にある作業小屋は屋根まで潰されてしまって、何もありません。彼はかなり上に住んでいたので無事だったのですが、上の小学校が避難所になっています。集落の６割強が家を失っていると思います。そのような中で、「何も要らないから、希望を持ってきてくれ」と言われました。大変重たい言葉になりまして、この大震災に取り組む中で、私にとっては、希望を共にできるかということが、大きなテーマになりました。

実は、自死率上位３県は、秋田、岩手、青森といわれています。奥羽教区は北東北３県ですが、トップ３になります。そのなかでも岩手県北が高く、同様に岩手沿岸も非常に高い地域であると言われています。その岩手沿岸に巨大な津波が押し寄せて、生活基盤全体を根こそぎ破壊してしまったということであります。

私の友人で、教会員のお連れ合いでありますが、三つの水産加工工場を経営しておりましたけれども、三つとも壊滅いたしました。社員 150 人のほとんどを解雇したと聞いています。３か月以上たって、ぎりぎりのところに来ています。その彼も地震と津波とさらに火災からも逃げのびて、４日目にようやく徒歩で家にたどり着くというような想像を超える経験をしています。しかしほとんどの社員を解雇して、今、数人の者と再建に取り組んでいるわけであります。

多くの人々が心に深い傷を抱え、また生活再建への見通しも立たず、さらに国からの義援金などもまだほとんど支給されない状態で、震災は、今も深刻な、生と死を分けるぎり

ぎりのせめぎ合いとして進行しています。どうしたら、希望を一緒に探せるか。被災地だけではなくて、原発事故が収束の見通しを立てられないような、非常に深い、不気味な闇と隣り合わせのこの東京でも、本当に人と人とがつながりを求めて、「共に生きる希望」というものが今こそ求められているのではないかということを思わされています。そのような中で、友人や知人、幼稚園・保育園の園長さんや信徒の皆さんを訪ね、どのように希望を一緒に探していけるかということを、私たちは考えていきたいと思いますし、また、そのようにできるだけ取り組んでいます。

この方は 98 歳のおばあちゃんで、教会の大事な宝物のようなかたであります。私たちの時には教会に、リュックサックを背負って、バスで乗り継いでくるというような、1 人住まいの自炊生活を続けていた凄いおばあちゃん。この方が私の後任の新生釜石教会の牧師であり、今回被災し、つらい経験をなさいました。この方の娘さんは保育園長で、73 人の子どもたちを無事に避難させたと話してくれました。皆さんと本当に再会しながら、この震災からの復興を、やはり具体的に一歩ずつ進めていくことが問われています。

そこで、具体的には何に取り組んでいるかというと、最初に申し上げましたように、私は岩手県の幼稚園との関係が深くありました。私は、子どもたちこそが、私たちの未来だと考えています。子どもたちが、私たちの目に見える希望だとも思います。そのような意味で、幼児教育支援に一生懸命に取り組みを続けています。

現実に教会だけでなく、行政も含めて全てが大きな被害を受け、子どもたちの施設も大変大きな被害を被っています。釜石では、教会と関係の深い教会員が園長をしている釜石保育園が徹底的に破壊されてしまいました。私が理事をしたおさなご幼稚園も大きな被害を受けました。大槌という町には二つの幼稚園しかありませんが、おさなご幼稚園と、もう一つのみどり幼稚園もさらに大きなダメージを受けています。また、私が園長もやったことがある、宮古にあるひかり幼稚園は、半年しかたっていない新車の園バスがだめになったというようなことであります。この三つの幼稚園と一つの保育園の全てに聞きましたところ、大体 70 人ほどおりました園児全員が無事に避難することができました。ただし、地震で避難したあと、お迎えに来た親御さんに子どもを渡して津波にのまれてしまったということが、いく組かありました。

これはおさなご幼稚園というところなのですけれども、最初に行った時、がれきを取り出して、ヘドロを取り出していました。ピアノも何もかも、この町全体も、ほぼ 1 階は津波でやられている。大槌は、中心街が燃えてしまいましたけれども、周辺のところは、このような形で家が残っています。しかし、そこもこのような形で、もう 1 階の天井間際まで、ここでも来ています。

この方が 80 歳になる園長先生で、何とか避難所に訪ねていって、主任さんとも再会しました。涙ながらに抱き合って喜びました。しかしこの園長先生も 3 日目にはがれきの山を越えて、避難所から幼稚園に戻って、復旧掃除を始めていたという、みんなが止めるのも聞かずに、がんばっておられたということです。そして、70 人余の子どもたちを高台の山

の避難所まで連れていったら、そこに大槌の町の大火が始まって、その火が飛んできて、山火事になったそうです。その山火事が迫ってくるのは本当に怖かった、どこへ行っていいか分からなかったということをおっしゃっていました。

２回目に行った時には、皆さんが一生懸命に掃除をして、復旧しようとしておりました。真ん中の黄色い保母さんの娘さんは、遠野の幼稚園の職員だったのですが、３月に退職されて、10 月に結婚するはずでした。お相手が大槌町の町役場の職員でした。大槌町は町長が亡くなっていますが、その時に一緒に亡くなった１人だということで、お嬢さんは大変深い悲しみにあるということを話しておられました。園長先生と娘さんとお孫さん、随分お元気になられました。

これは、４回目にこの前行った時の、森さんという歌手の方が来て、子どもたちを慰めて、とても楽しい雰囲気でした。７０人の幼稚園を再開したら、最初 10 人しか来なかったそうです。ようやく今、40 近くは子どもが戻ってきたかなということですが、ただ、大槌でも若い方々が職場を失って、住むところもないので、町から内陸へ流出するといったことが起こっています。

これは、釜石保育園です。子どもたちの笑顔が戻ってきました。釜石の教会の向かいにある、100 メートルほど離れたところにある、まだ建ててから 12 年の保育園ですが、もう、後ろからと横からとの津波で壊滅的です。これはホールです。そして玄関がこれです。もうぼろぼろになっています。これは２度目に行った時ですけれども、廃園になった幼稚園を借りることができて、海岸から８キロほど離れたところで保育園を再開しています。70 数人いた子どもたちの８割ぐらいまでは戻ってきているということですが、８キロも内陸に入っているので、大変不便です。職員の皆さんも、車を失ったり、家や家族を失っている人もいます。そのような中での再開に取り組んでいますが、子どもたちの笑顔に、やはり未来を見たいという思いであります。

これは、私が今、教会関係で、ドイツの人たちと一緒に、沿岸に何とかと支援の輪を広げたいということで、ブレーメンの市民が寄付をして、釜石保育園に保育園用の車２台を一月ほどで寄贈できたという、そのような記念の写真です。これは、３回目に行った時の写真です。控えめに「ブレーメン市民寄贈」と書いて贈ったら、もっと大きいほうがよかったと言われたのですけれども、この車は釜石に２台しかないので、先生たちが誇らしげに走っているということです。左側から２人目が、ドイツ教会の方です。

これはもう一つ、みどり幼稚園という、大槌の幼稚園です。ここは火災もあって、しかも１階ではなくて２階まで津波に襲われました。立正佼成会の人たちに、もし可能性があるなら、この幼稚園の応援に協力して頂けないかということを思っています。これは２度目に行った時の写真だと思いますが、若い職員が掃除をしていていました。やはりここも玄関がぼろぼろ。新園舎はまだ、建てて５年目なのです。それで借金もたくさん残っていて、やられて、私が行った時には庭にもまだがれきがあって、この前日に庭からご遺体が出たそうです。自衛隊や警察、消防の方たちが今も色々な所で遺体を探しておられます。

本当に頭が下がる思いがします。そして、このみどり幼稚園の園庭、だいぶ片づきましたけれども、今、別なところで、仮園舎で保育を始めています。これが仮園舎で、高校の合宿所を借りてやっています。園長先生とは、お見舞いを持っていくたびに会えなくて、職員に渡してくるということが続いています。写真を撮れないでいるのですが、園長のご両親の理事長ご夫妻はまだ遺体が見つからないということです。そのようなことで、このみどり幼稚園支援にも取り組んでいます。

もう時間もありませんので簡潔にしますが、これは釜石の、私がいたときのバラであります。１株からこれぐらい育てたのですけれども、全部だめになって、でもこれが、今の状態。株は、根っこは残っていて、新しい芽が芽吹き始めていました。希望があるかなあという思いがいたします。それとは関係ないのですが、これは、私が今いる千代田教会の庭に植えて、釜石の子どもを育てていて、これぐらいに大きくしてあります。

これから少し変な話になってしまうのですけれども、これは、畠山さんという、先ほどの漁師さんの息子さんです。日本が、地盤が沈下したということは分かると思うのですが、満潮ではあるのですけれども、護岸を越えて、海が迫っているのが分かりますでしょうか。要するに、１m近く沈んでしまったということです、５、60 センチ以上。この時は喜ばれているものは、ハエ取り紙でありました。畠山さんのすばらしい舞根浜も大きな痛手を受けていますが、今回ハエ取り紙を持っていって、喜ばれました。

それからもう１人、この方は、ケセン語聖書を訳した、大船渡の山浦玄嗣先生という、時々テレビに出る先生なのです。お医者さんで、気仙地方をこよなく愛している先生で、カトリックの信者で、ケセン語聖書を出版した方です。この方も今度、東京で講演して頂きくことになりましたので、お呼びすることになっています。あと、畠山さんにも、今度またおいで頂こうと思っています。

これは、全く、すみません、時間ばかりかかってしまって。資料にあった、釜石応援の一つです。「ペレットストーブ」をご存知でしょうか。大手のコロナにも同じようなペレットストーブがあるのですけれども、コロナで出しているものは、電気が必要なのです。でもこれは、完全に電気の要らないストーブであります。私は前にもこの人のものを売ろうと思って頑張っていたのですが、なぜかというと、息子の同級生のおやじさんだからです。工場は海辺にあったので、壊滅的な状態だと思いますが、それでもまだ再建するというのです。二重債務に苦しみながらも、このペレットストーブを１０００台売りたいと。しかもこのペレットは、岩手の間伐材を使った、本当に扱いやすいストーブですし、地球環境にも優しいのです。ぜひ東京でも、どこかで広めていただきたいと思っています。

もう一つは、裏側のほうです。今回の震災で、私たちがよく使っていた温泉街が大変大きなダメージを受けている。この「志戸平温泉」というところは、私もよく集会などで使った温泉ですが、200 人の社員のうちの 62 人を解雇したとあります。沿岸からは 100 キロ離れた花巻で、30％を解雇せざるを得ない状況があります。もちろん沿岸もすごい状況なのですけれども、今、私たちの被災地に起こっていることは、２次災害とも言うべき雇用

の問題で、先ほども言いましたが、本当に仕事がないという、ぎりぎりの状態が続いてきていると思います。

そのために、なんとか私がお願いしたいのは、皆様方が足を運ぶということです。

これは遠野です。私たちは遠野に 12 年近くいました。これは五百羅漢といって、義山という和尚さんが、遠野の飢餓で死んだ人々を弔うために、自然石に掘った、石彫りの羅漢です。何百年もこけむして、ほとんど見えづらいのですが、このような山間の谷の自然石を探っていくと、羅漢が彫られています。ただしクマに注意して行っていただきたいと思いますが、そのような場所です。

これは、遠野のやはりデンデラ野という、姥捨て山のお話の場所です。美しい岩手に、やはり皆さん行ってほしいと、今、思っています。

これは、遠野のカッパ淵です。カッパの伝説があります。これは、おとぎ話のような、「昔あったずもな」で始まる、民話のふるさとなのです。

これは、曲がり家といいます。このような、動物と人間が一緒に住むようになっている家や水車小屋など。これで終わりますけれども、大変有名な水車小屋であります。美しいこのような岩手を子どもたちの未来に残していくということが、私たちの大きなテーマだと思っています。

現在、ドイツの教会の皆さんと一緒に、私は、「海と子どもと音楽」というテーマを掲げて、釜石、大槌、宮古の幼児施設や、漁師さんや、町の音楽愛好家の皆さんとの関わりに、毎日のように一生懸命に取り組んで後方支援に励み、月に一度は行ったり来たりしています。子どもたちの笑顔こそが私たちの未来であり、希望だと思いますし、音楽は、深い癒しと、慰め、喜びであります。また海は、破壊の力とともに、命を育み、漁師さんたちの生活の基盤であります。そのような子どもたちの未来、若い女性たちの未来、そのことを受け止めながら、そして今は福島の原発の問題をどのように受け止めて、次の命をつないでいくかということに、われわれは本当に取り組まなければならないと思っています。岩手の子どもたちのために環境整備をし、中高年の皆さん、あるいは若いかたがたが流出しないようにと願っています。この前行った時に、仮設住宅に入居が始まって、まだ誰も埋まっていないような状態の中で、すでに３人のかたが亡くなったそうです。自殺をしたということであります。そのような意味で、私たちは、そのような心のケアを含めて、子どもたちが残れる町をどうつくるかに、少しでも関わって行きたいと思います。

若い友人が、「命の使い方を根本から問われていると思った」と話してくれました。その命の使い方は様々だと思っています。ボランティアのように、具体的に、自分で行って、どうするという、そのような命の使い方もあります。命というものは、言い換えれば、私たちの時間であります。時間をどのように使うかということが、命の使い方であります。そしてその命の代償として私たちが得るものが、お金であります。私たちは、お金を自分の命の代償として受け取っています。その意味で、お金の使い方ということも、命の使い方につながるものだと思います。今なお義援金が払われていない、そのような状況にある

人々と私たちがどのようにつながるかとしたら、安易な思いではなくて何らかの形で、意味ある旅で東北に行ってみるということも、一つのあり方かなと思わされています。

「命の使い方」を短縮すると「使命」になると思います。使命というのは、命の使い方である、とも読むことができます。私たち、今、21 世紀のこの時代に生きる者は、自分たちの命の使い方、幅のある意味での「命の使い方」をどうするかを考えてみる、大変大事な良い機会だと思います。

ぜひ、このすばらしい岩手、宮城、福島、本当に旅をし、追悼、あるいは祈念という旅をなさったらいかがかなということを思いながら、最後は観光案内のようで申し訳ないのですが、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。